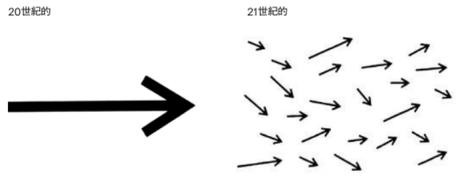


新しく登場する建築家たち

【実践編】イントロダクション

小嶋一浩が「大きな矢印から小さな矢印の群れへ」というダイアグラムを示して、大きな矢印に「20世紀的」、小さな矢印の群れに「21世紀的」と説明を付けていた。確かに今、社会・経済・建築や都市・環境、あらゆる領域で多様な方向性を示しながら小さな矢印の群れへ向かうことが観察できる。



20世紀の都市は社会活動を構造化するハードウェアとして構想されてきた。ル・コルビュジエの「輝く都市」「チャンディーガル」、ブラジルの都市計画家ルシオ・コスタとオスカー・ニーマイヤーの「ブラジリア」、丹下健三の「東京計画1960」など、それは大きな矢印のようにユートピアとしての都市がプレゼンテーションされていた。しかし、世界の都市は経済活動のための同様な「現代都市」に改変され、不動産商品としての建築物の集積場となってきた。

横文彦の「漂うモダニズム」という論考に、グローバリズム以降の建築家の職能のあり様が「軍隊」と「民兵」という言葉で表現しているが、現代の日本では経済活動の開発に携わる「軍隊」と、生活を支える空間にかかわる「民兵」に切り分けられているようである。それだけ社会構造が分かれてしまったということなのだ。そんなことに気付かされたのは2013年に宮崎晃吉が発表したHAGISOである。自らが住んでいたアパートを借り受け「最小文化複合施設」として再生するというプロジェクトのだが、それは自らがクライアントでありプロデューサーであり、事業を継続するマネージャーであるという建築家の登場であった。そこでは余剰の資金を持たず切実な建築行為として社会に働きかけていた。そして今、同じように感性の強い若手建築家がこの領域に参入している。都市の主人公はその住人であり、その都市をつくる主体が変わりつつある。もはや投資家や資本家に答えるだけの建築家ではなくなること示している。

山本理顕が「Local Republic Award」という顕彰事業を始めているが、地域社会に貢献する事業を探し出して顕彰しようとするものである。そこにはこれまでの建築家という職能を超えていく人々や組織が登場している。空間という言葉を使って社会に働きかける新しい建築家の登場、それは「軍隊は命令に従うだけで思想がないが、民兵は自分のアタマで考えて行動する」ということを示している。「 commons を再生する東京」に登場していただく建築家たちは皆、新しい建築家に属する。2014年に発表された仲俊治たちの「食堂付きアパート」は共同性をサポートする新しい都市の建築タイプロジー。2015年に始まった栗生はるかたちの「アイノメ」は commons をサポートする新しい建築表現。そして、2020年に竣工した山道拓人たちの「BONUS TRACK」は地域を支える新しい commons としての商業を示している。これは社会で承認され、都市づくりの中心になる先駆者のかもしれない。

横文彦は、これから先の希望として「共感のヒューマニズム」というキーワードと、「アナザーユートピア」というアイデアを示している。アナザーユートピアは、居住都市の都市組織となる、新しい共同体をサポートする空間である。新しく登場する建築家たちはそのための建築類型を探求しているのだ。

「 commons の再生」の最前線

2013.3
地域をつなぐ最小文化複合施設
【HAGISO】
 設計 宮崎晃吉 (HAGI STUDIO)
 事業者 HAGI STUDIO
 運営 HAGI STUDIO
 所在地 東京都台東区中



2014.6
住まいと農業を結んだネットワーク
「ワカミヤハイヴ」— 新たな農業プロジェクト
 設計 落合正行+PEA... 落合建築設計事務所
 事業者 個人
 運営 オーナー+入居者
 所在地 東京都足立区西新井



2017-
家守型のエリアリノベーション
【co-toiro iwabuchi】
 設計 建築/山本理顕、インテリア/織戸龍也
 事業者 株式会社 岩瀬家守舎
 運営 株式会社 岩瀬家守舎
 所在地 東京都北区西新町



2018.7
古い躯体を生かして作る
東京都心の地域拠点
【ミナガワレブリッジ】
 設計 神本豊秋+再生建築研究所
 事業者 大一
 運営 再生建築研究所
 所在地 東京都渋谷区神宮前



2018.11
騎住融合型集合住宅による
commons の創出
【榊の音 terrace】
 設計 つばめ建築設計+スタジオ伝依
 事業者 住那楽商事
 運営 つばめ建築設計および入居者による自主管理 | 所在地 東京都練馬区桜台



2019.3
地域産業のハブの創出
【KOCA】
 設計 @カマタ(本体工事デザイン監修及び内装及び屋外什器設備)+馬淵建設(本体工事設計)
 事業者 @カマタ
 運営 @カマタ
 所在地 東京都大田区大森西



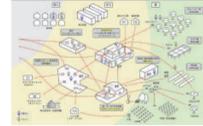
2019.10
郊外における仕事を介した
新しい場の創出
【富士見台トンネル】
 設計 能作淳平 (ウサクワンペイアーキテック)
 事業者 能作淳平
 運営 能作淳平
 所在地 東京都国立市



2019.12
歴史を活かした持続可能な
commons 再生拠点
【榎五米店】
 設計 アルセント建築研究所
 事業者 仲宿商店街振興組合
 企画運営 (株) 向こう三軒両隣
 所在地 東京都板橋区仲宿



2020.5-
都市内農業と本屋を組み合わせた
commons の創出
【東久留米タキプロジェクト】
 設計 IN STUDIO (小南泉+奥村直子)
 事業者 奈良山園
 運営 奈良山園
 所在地 東京都東久留米市



【実践1】路上空間の活用拠点 地域サロン「アイノメ」

栗生はるか | 文京建築会ユース・Mosaic Design Inc. | HARUKA KURYU | BUNKYO YOUTH, MOSAIC DESIGN INC.

●2015年より文京区根津にある第125年と言われる六軒長屋の一角の空き家を借り、地域サロン「アイノメ」と名付けて活用を始めた。文京建築会ユースという有志団体での地域活動の中で、かつて近隣住民のサロンであった銭湯に変わる「地域の居場所」の必要性を感じていた。また、●今や暗黒化した藍染川周辺の周辺はかつて藍染と呼ばれていた「アイノメ」という名は、その旧町名からとった。住人によって構成される藍染町会、若手がキーマンとなり新陳代謝を兼ねて受け入れ体制が保たれている。私たちはそのよ



パノラマ画像: SHIMADA, Yusuke / agpm + Haruka Kuryu

な地域に受け入れてもらい、その関係性の中で場づくりの機会を持つことができた。●アイノメは今でも年に一度、根津神社の例大祭時に藍染町会の御神酒所となる。●また、アイノメは、藍染大通りという昔から地域の広場として活用されている通りで、アイノメは創設当初牛乳屋を営み、通りに面して並ぶ味噌・醤油屋、酒屋、米屋等と共に商店街を形成していた。通りは、1970年代に都市部で多く設置された地域住人によって管理、運用される「遊戯道路」である。その地が専業主婦を失い形骸化して

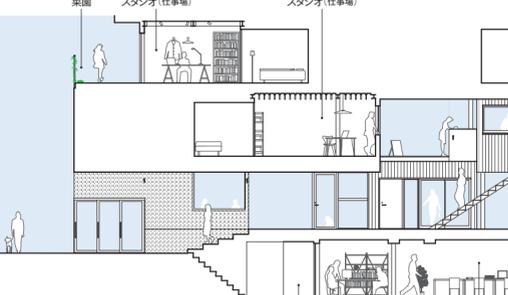
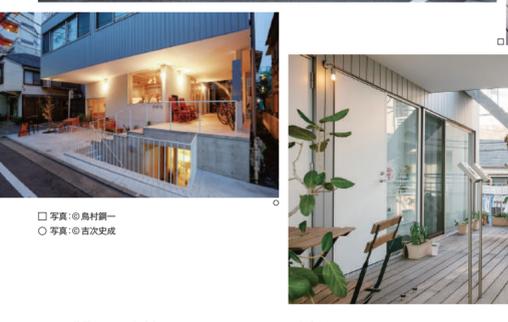


外観: 内観写真4点 © 藤本一貴

【実践2】「紐」としての立体路地 食堂付きアパート

仲俊治・宇野悠里 | 仲建築設計スタジオ | TOSHIMARU NAKA, YURI UNO | NAKA ARCHITECTS' STUDIO

●食堂付きアパートは、有名な商店街の傍に建ち、ちょうど商業系地域と住居系地域の境界に位置する。このアパートは、仕事場が内包された5つのSOHO住戸、半地下のシェアオフィス、そして街路に面した小さな食堂という、3つの用途を融合したものである。どの用途も私たちが「小さな経済」とぶぶ、個人の仕事や特技を交換するための場を、これが「立体路地」とよぶ外部空間で相互に密接に関係付けられている。1階は隣地の飲み屋が



□ 写真: © 高村一司
 ○ 写真: © 吉次英樹

●立体路地は地下1階から3階まで、螺旋を描くように展開する。ここには共用の洗濯機や菜園、客用トイレが配置されている。日々の生活のなかで居住者が行き来する「もろろろ」の過程で、下町た小さな食堂という、3つの用途を融合したものである。どの用途も私たちが「小さな経済」とぶぶ、個人の仕事や特技を交換するための場を、これが「立体路地」とよぶ外部空間で相互に密接に関係付けられている。1階は隣地の飲み屋が

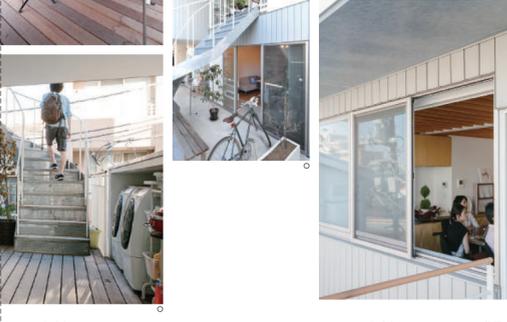
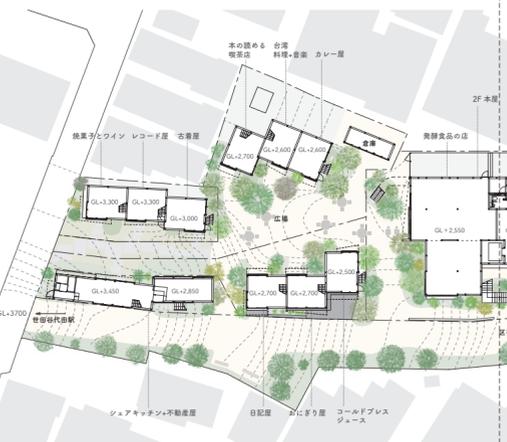


写真: © 高村一司
 写真: © 吉次英樹

【実践3】紐状空間に作る新築の商店街 下北線路街BONUS TRACK

山道拓人+千葉元生+西川日満里 | ツバメアーキテック | TAKUTO SANDO, MOTOKO CHIBA, HIMARI SAIKAWA | TSUBAME ARCHITECTS

●下北沢の街並みを引き継ぐ新築の商店街
 下北沢では、個性豊かな小売店が連なる路地が形成されてきた。しかし、近年の賃料高騰でチェーンが増え、街並みが失われつつある。地下化した小田急線の紐状空間を埋める緑路跡地に建つ「BONUS TRACK」は、個人が小売店を始めやすく、街並みを引き継ぐ新築の商店街をつくる計画である。



俯瞰写真以外 © morinikayasuuki

●49%の余白
 職住近接の兼用住宅としての入居しやすいことと共に、入居者が実際に住んで当事者意識を持つことが、場所を育てるからである。兼用住宅として、住宅地の49%は住宅以外の機能を持たせる。この余白を活用し、住宅地の環境を作り替えることができたい。BONUS TRACKは、近隣の空き活用を手本として位置付けられている。

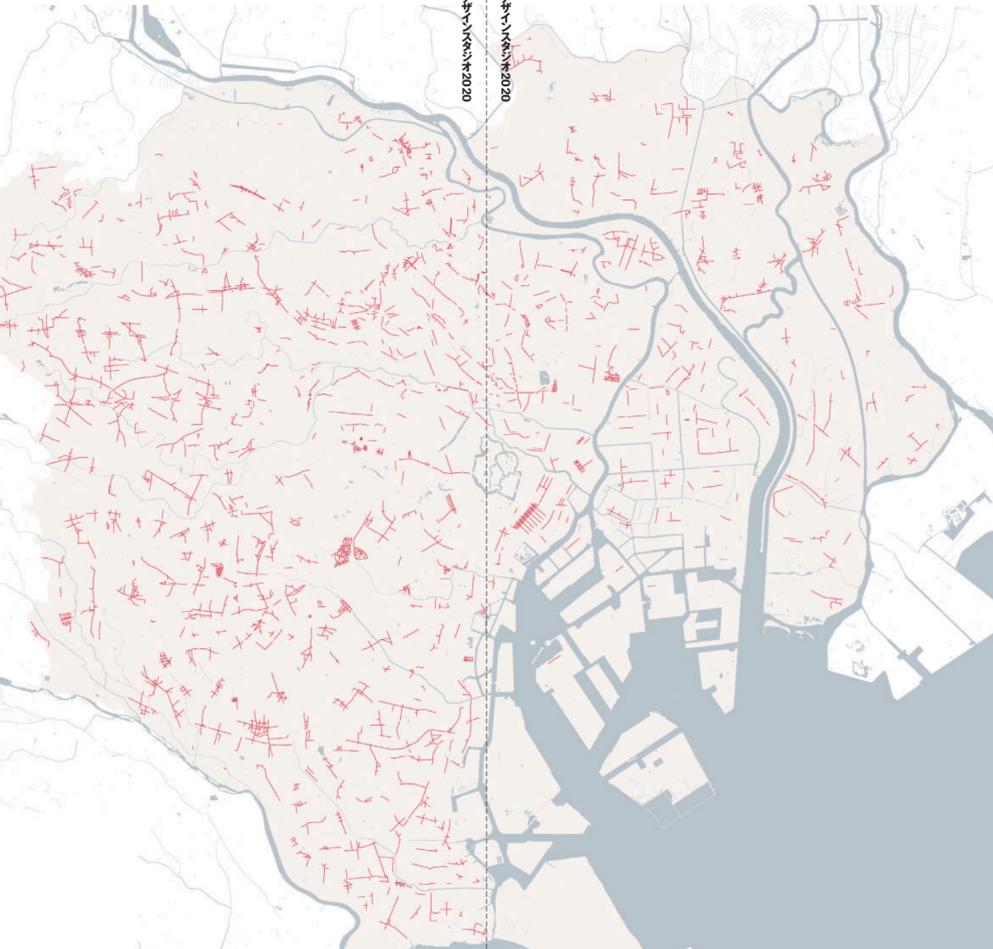


設計 ツバメアーキテック (山道拓人+千葉元生+西川日満里)
 専業主 小田電鉄 運営 散歩社

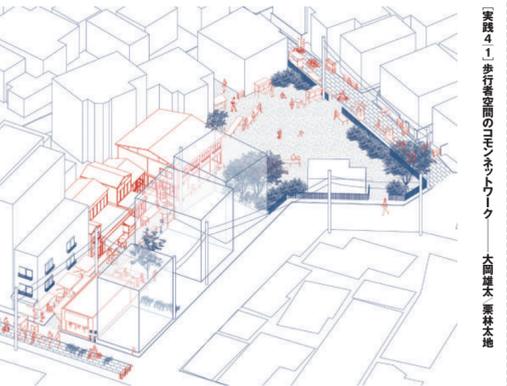
【実践3】紐状空間に作る新築の商店街 下北線路街BONUS TRACK | 山道拓人+千葉元生+西川日満里 | ツバメアーキテック

● 未来の東京という都市について、法政大学の都市デザインスタジオで研究を続けている。東京の23区には1,771の商店街があるが、その商店街を抱き込む生活圏を構想し、そのなかに都市におけるコモンズ再生の可能性を検討している。この都市デザインスタジオでの試算であるが、23区内の商店街の総延長は約640kmあって、商店街の道路を踏んで歩行者モジュールは約3.2kmの歩行者空間が生まれる。これは皇居の面積の約1.5倍の広さである。商店街は、まるで地図の上に線をばらまいたように東京の都市内にかなり均等に分布しているのであるが、それは、商店街が日常の買い回りなので商店街を中心とする生活圏が存在していることを示している。商店街の商圏を500mとすると東京23区の全域をほぼカバーする。なので、東京に住む人は誰もいづれかの商店街に所属しているという感覚を持っているのではないかと思う。商店街に共有の居場所であると感じられる空間が用意され、たとえば顔見知りの店主をハブに人々が交歓できる場がいくつも生まれれば、そこにコモンズを再生する可能性がある。

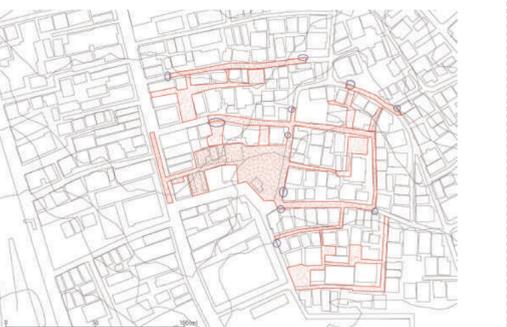
● 提案する商店街は歩行者モジュールとした両側町で、店前空間には商品がみ出ることが許され、道には一坪ショップのフロンやテーブルイスが置かれ、近くの食堂の天蓋付きのダイニングスペースとなる。空き店舗は「町の工具箱」となり、共同キッチンや子ども食堂、障



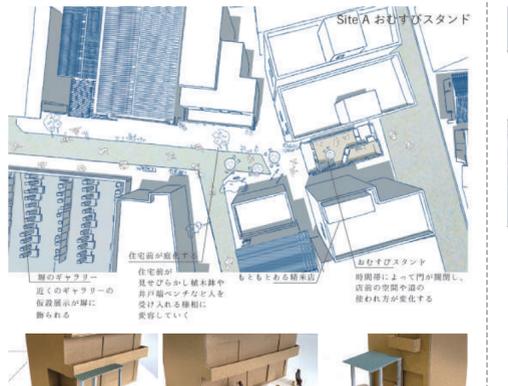
【紐マップ】商店街のプロット
まるで紐をばらまいたように均等に分布している



● プロジェクトは空き家のリノベーションと公園活用で構成され、シェアハウス、パン屋、休憩所、シェアオフィスを提案する。ここには商店街における人の居場所がある。



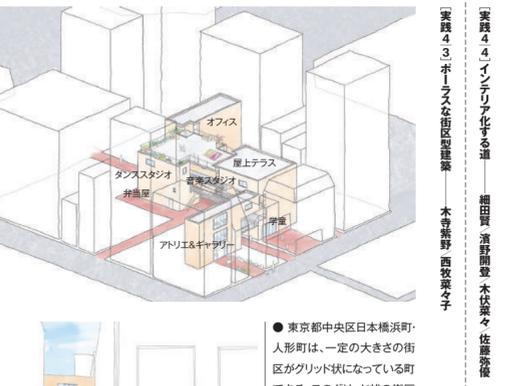
● このストリートファニチャーはベンチ、机、棚や看板、小さな屋根などで、周辺の活動に合わせて設置する。例えば近くの保育園の送り迎えの時間帯を動かす「木戸番」となる人を決めることにする。臨機応変に、必要な時に地域のコモン空間が生まれる環境を作り出す提案である。



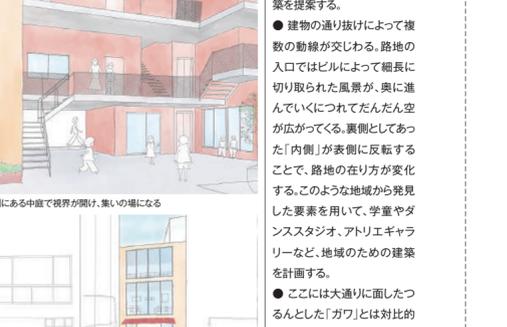
● 江東区は庭が多い住戸が多く、自転車や植木鉢を置くなど庭の要素が道にはみ出すようなふるまいが多くみられる。それを、個人による道の「庭化」とする。敷地となる深川資料館通りも植木鉢がみ出し、商店街全体を庭のように使用していた。そんな表の商店街は週に1度ほど訪れる店が多いのに対し、裏道には八百屋など日常に使う店が点々としている。私たちは裏道にある店を買い回りの商店街と位置付け、庭化を提案することで周辺住民の交流のきっかけにしようと考えた。



● 今すでに存在している庭化を認識し、またそれらがより激しく起こるようにそれぞれ5つの敷地の特徴に合うものを組み込んだ。そうすることで、裏道全体が庭のような人の居場所になり「個人の庭化」から「みんなの庭化(コモン化)」への触発が起こることを目指した。



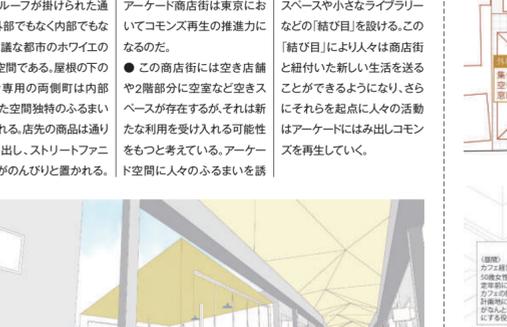
● 東京都中央区日本橋浜町・人形町は、一定の大きさの街区がグリッド状になっている町である。このグリッド状の街区には細い路地が入り組んでおり、街区の内側にも店の入口があったり、住人たちが並んだ植木があったり、街区の外側とは異なるより親密な生活風景がある。ここに、外部空間を巻き込んだポラスな街区型建築を提案する。



● ここには大通りに面したつるんとした「ガワ」とは対比的な、襲をもった「アン」が存在する。街区の内側にごそ、生活者に開かれた空間があるのでないか。



● 阿佐ヶ谷パルセンターは東京都で42カ所残っているアーケードが架けられた商店街のひとつである。都市の中で大きなルーフが掛けられた通りは、外部でも内部でもない不思議な都市のホワイエのような空間である。屋根の下で歩行者専用の空間など空気を浄化された空間独特のふるまいが生まれる。店先の商品は通りにはみ出し、ストリートファニチャーがのんびりと置かれる。



● 導する小さな都市エレメントを配置し、空きスペースには日常も活動する新しい地域の生活圏に対応するコワーキングスペースや小さなライブラリーなどの「結び目」を設ける。この「結び目」により人々は商店街と結びついた新しい生活を送ることができるといふことになる。さらにそれらを起点に人々の活動はアーケードにはみ出しコモンズを再生していく。



● 都心近郊の東京都東区馬場地区において空き家と周辺敷地を活用し地域に開かれたコモンズのネットワークを計画する。1970年代に開発された近郊住宅地は高齢化が進み空き家も増加しつつあり、都心に通勤していた人達が定年後地域で過ごす中でコミュニティの希薄化がられる。第一種住居専用地域であるが、床面積1/2か250m²以下である。



● 都心近郊の東京都東区馬場地区において空き家と周辺敷地を活用し地域に開かれたコモンズのネットワークを計画する。1970年代に開発された近郊住宅地は高齢化が進み空き家も増加しつつあり、都心に通勤していた人達が定年後地域で過ごす中でコミュニティの希薄化がられる。第一種住居専用地域であるが、床面積1/2か250m²以下である。

コモンズを再生する東京

【実践編】イントロダクション
新しく登場する建築家たち

【実践1】路上空間の活用拠点
地域サロン「アイノメ」
栗生はるか | 文京建築会ユース-Mosaic Design Inc.
HARUKA KURYU | BUNKYO YOUTH, MOSAIC DESIGN INC.

【実践2】「紐」としての立体路地
食堂付きアパート
仲俊治・宇野悠里 | 仲建築設計スタジオ
TOSHIMARU NAKA, YURI UNO | NAKA ARCHITECTS' STUDIO

【実践3】紐状空間に作る新築の商店街
下北線路付 BONUS TRACK
山道拓人+千葉元生+西川日満里 | ツバメアーキテツ
TAKUTO SANDO, MOTOO CHIBA, HIMARI SAKAWA | TSUBAME ARCHITECTS

【実践4】商店街を抱き込む生活圏
法政大学大学院 都市デザインスタジオ2020
大岡雄太/栗林太地/鈴木真優/池内真奈/木寺紫野/西牧菜々子/細田賢/濱野開登/木伏菜々/佐藤弥優/関駿介/森谷薫平
HOSEI UNIVERSITY | URBAN DESIGN STUDIO 2020

